

5.3 生態系の人為的な攪乱状況（外来種と在来種の分布状況）

近年、鑑賞や家畜対象として輸入された種の自然界への逸出などに伴って、本来は日本に生息しない国外の生物種が侵入し、自然界へ広がっている例が数多くみられます。

このような人の活動に伴う生物の移動と再野生化により、生態的に優勢な外来種によって在来の種が排除されたり、置換されたりしています。また、タイワンザルとニホンザルのように自然界では起こらない交雑によって雑種が生まれ、地域で保有されている固有な遺伝子の喪失が懸念されています。

ここでは、人為的な生態系の攪乱状況を明らかにするために、外来種や、それらと生態的に競合する在来種の確認状況について整理しました。

【ミシシippアカミミガメ（外来種）とクサガメ、イシガメ（在来種）の確認状況】

（両生類・爬虫類・哺乳類調査）

- ミシシippアカミミガメは在来のカメ類（クサガメ、イシガメ）の生息するほとんどの河川で確認

北米産のミシシippアカミミガメは、在来のクサガメやイシガメと生息環境が似ていることから競合すると考えられており、在来2種の生息に影響を与えていることが憂慮されています。そこで、これら3種の確認状況を整理しました。

今回とりまとめを行った26河川のうち、ミシシippアカミミガメは北海道を除く全国で、クサガメは関東地方から九州地方の河川で、イシガメは北陸地方を除く関東地方から四国地方の河川で確認されました。ミシシippアカミミガメのみが確認されている河川は2河川のみで、その他の河川では在来のカメ類とともに確認されました。

（資料掲載：5-22～5-24、5-33ページ）

確認河川数の比較（対象河川：25河川）

種類	前々回調査	前回調査	今回調査
ミシシippアカミミガメ	9河川	12河川	15河川
クサガメ	13河川	14河川	16河川
イシガメ	7河川	8河川	8河川

確認地区数の比較（今回調査 対象地区数：51地区）

種類	確認地区数
ミシシippアカミミガメのみ確認	13地区
ミシシippアカミミガメをクサガメ、イシガメとともに確認	20地区
クサガメ、イシガメのみ確認	18地区

北米産のミシシippアカミミガメは、1950年代後半から、いわゆる「ミドリガメ」として販売・飼育され、1960年代後半から、野外で野生化した個体が見つかるようになりました。現在では本州、四国、九州のほかに、沖縄島や小笠原父島からも生息が確認されています。河川や池沼、水田などに広く生息し、在来種のクサガメやイシガメと生息環境が競合すると考えられており、ミシシippアカミミガメがこれら在来2種の生息に影響を与えることが憂慮されてい

ます。

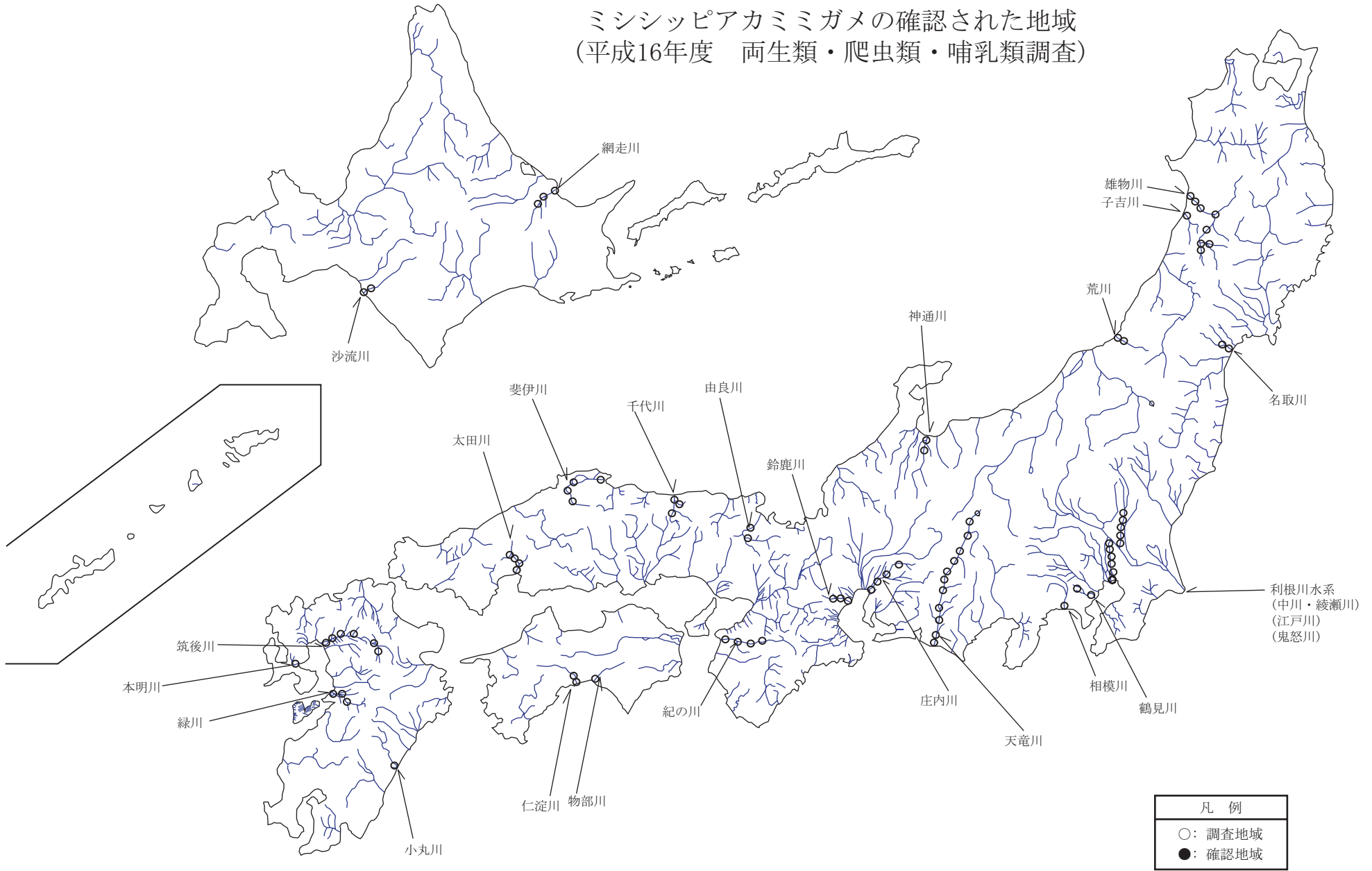
クサガメは、北海道を除く平地の河川、池沼、水田などに、イシガメは、北海道を除く地域に分布し、平地よりも山間部周辺の河川や池沼および水田などに生息しています。

今回の調査結果をみると、ミシシippアカミミガメのみが確認されている河川は2河川のみで、その他の河川では在来のカメ類とともに確認されました。また、これら3種のいずれかが確認された河川における調査地区のうち約3分の1以上でミシシippアカミミガメとともに確認されています。そして、前々回から今回の調査結果をみると、ミシシippアカミミガメの確認河川数は増加する傾向がみられました。

調査結果からはミシシippアカミミガメによって、在来種が減少している様子はいかがえませんでした。しかし、個体数レベルでは何らかの影響がみられる可能性があります。また、生息調査においてカメ類は確認するのが難しく、調査結果は必ずしも生息に関する現況を正確に表現しているとは限りません。そのため、今後もモニタリングを続け、データ数を増やすことも必要と考えられます。

ミシシippアカミミガメの確認された地域
(平成16年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)

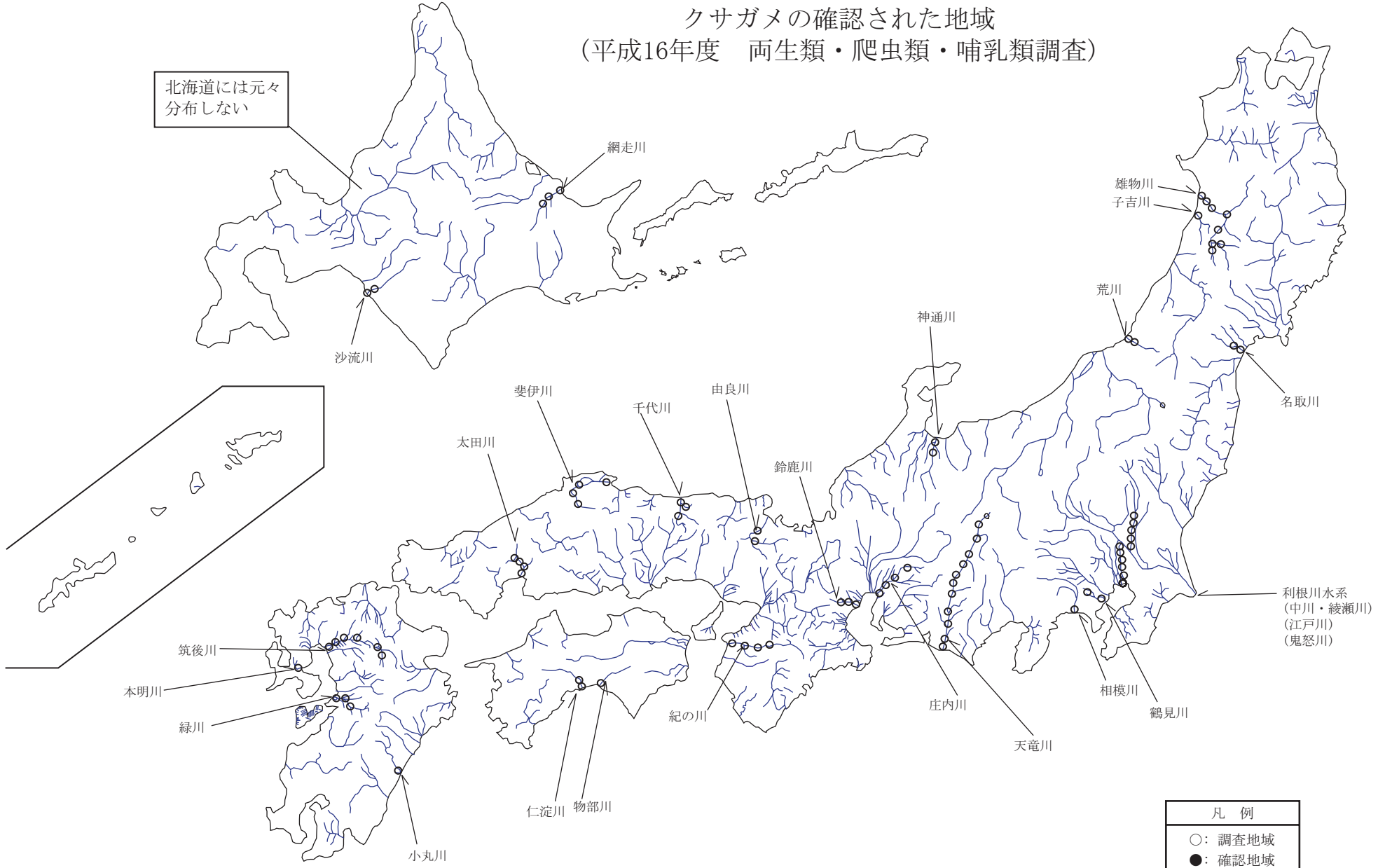
5-22



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

クサガメの確認された地域
(平成16年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)

北海道には元々
分布しない

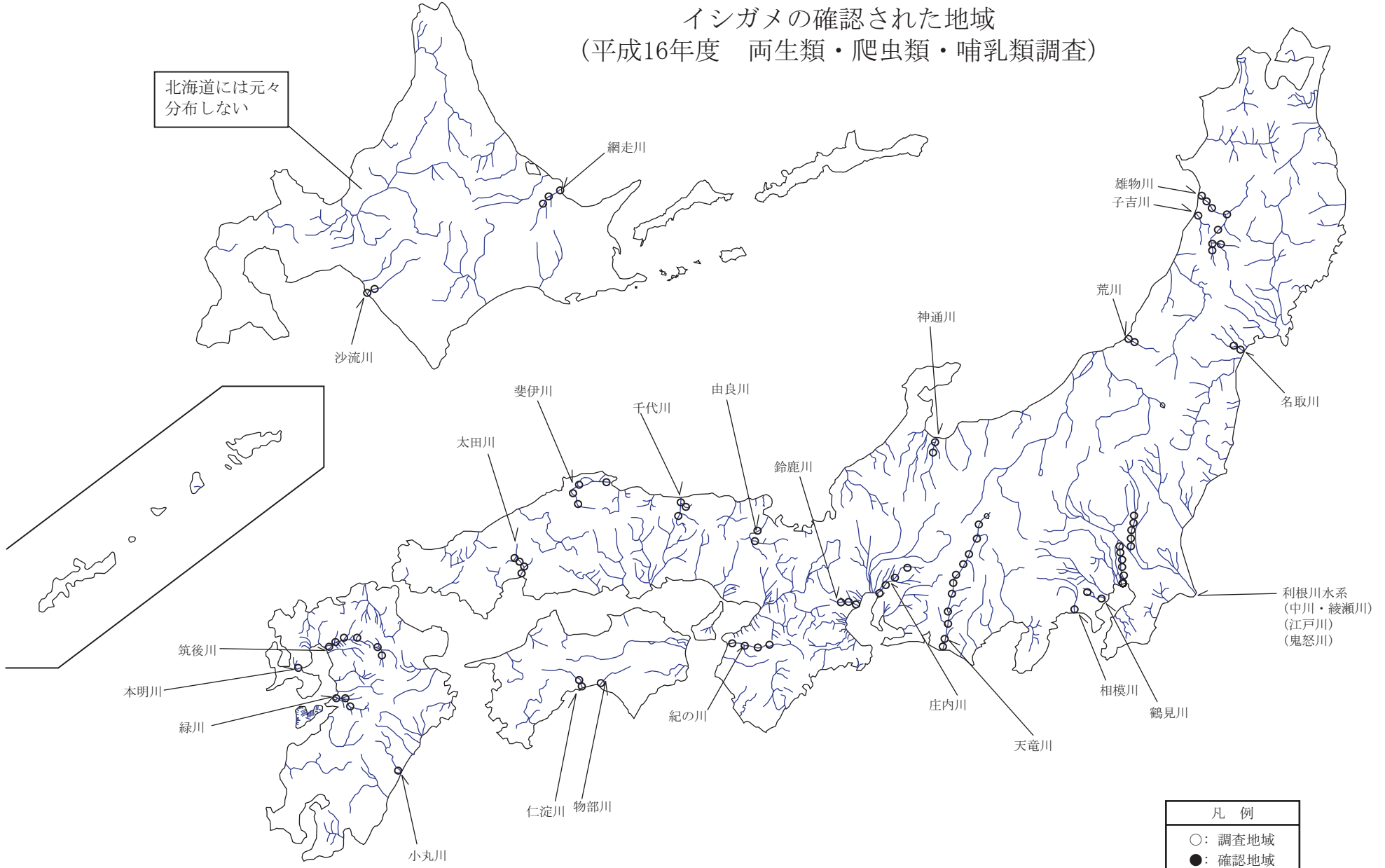


凡 例	
○	調査地域
●	確認地域

注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

イシガメの確認された地域 (平成16年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)

北海道には元々
分布しない



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

- **アライグマの確認河川数は2河川から5河川へ増加傾向**

外来生物法により特定外来生物として指定されたウシガエル、カミツキガメ、台湾ザル、台湾リス、ヌートリア、アライグマの確認状況を整理しました。

今回とりまとめを行った26河川のうち、ウシガエルは、ウシガエルは北海道地方を除く21河川で確認されました。ヌートリアは、中部地方、近畿地方、中国地方の6河川で確認され、そのうち5河川では継続して確認されました。アライグマは、北海道地方の沙流川、関東地方の相模川、中部地方の庄内川、近畿地方の由良川及び紀の川で確認されました。そのうち3河川では、今回調査で新規に確認されました。カミツキガメ、台湾ザル、台湾リスは今回調査では確認されませんでした。

(資料掲載:5-27～5-29、5-32～5-33ページ)

確認河川数の比較 (対象河川: 25河川)

種類	前々回調査	前回調査	今回調査
ウシガエル	19河川	20河川	21河川
カミツキガメ	1河川	0河川	0河川
台湾ザル	0河川	0河川	0河川
台湾リス	0河川	0河川	0河川
ヌートリア	3河川	5河川	6河川
アライグマ	1河川	2河川	5河川

特定外来生物とは、2005年6月1日より施行された特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律(外来生物法)により、生態系、人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれがあるものの中から指定された、海外起源の外来生物です。特定外来生物は飼養、栽培、保管、運搬、輸入といった取扱いを規制され、防除等の対象となっています。また、ウシガエルは平成18年2月に特定外来生物に指定されました。

ここでは、特定外来生物として指定されたウシガエル、カミツキガメ、台湾ザル、台湾リス、ヌートリア、アライグマの確認状況の5種について、前々回調査から今回調査にかけての確認河川を整理しました。

ウシガエルは、1918年、ニューオーリンズから輸入されたのが最初で、食肉の輸出生産のために養殖されました。戦後の一時期に外貨を得る重要な手段となるように導入されましたが、その後、養殖が廃れ放置されました。前々回から今回の調査ともに確認河川数が多いことから、本種は各地で定着していると考えられます。本種は、増殖力が高く、大型に成長することから在来カエル類等の減少が懸念されています。

カミツキガメは大型の水生ガメで、北米の冷帯から熱帯までを原産地とします。1960年代から子ガメがペットとして輸入され、野外に放逐されるようになり、野生化した個体が沖縄を含む日本各地の都市部や郊外の池、水田、湖沼、河川等で確認されています。千葉県北西部の印旛沼とその流入河川では、野外での繁殖を裏付ける小型の幼体も多数確認されており、定着していると考えられています。前々回調査では、九州地方の緑川で確認されましたが、今回調査では確認されませんでした。

ヌートリアは、大型のネズミ類で、1939～49年、軍用の毛皮獣として移入され、各地で養殖されました。しかし終戦後、養殖場の閉鎖によって野外に放逐され、野生化しました。南アメリカ原産で、水辺に生活し水草などを食べます。ヌートリアは中部地方の2河川、近畿地方の1河川、中国地方の3河川で前々回から今回の調査で継続して確認されたことから、本種が定着している様子が伺われます。また、在来の生態系に何らかの影響を与えている可能性もあり、今後とも引き続き生息状況を把握していく必要があります。

タイワンザルは台湾原産であり、動物園や観光施設の飼育個体による逃亡や放獣などの原因による野生化が始まり、下北半島、伊豆大島、和歌山県北部（大池地区）での生息が確認されています。古くは、第二次世界大戦末期（1940年頃）に伊豆大島の動物園から逃亡し、元来サルのいない大島に今では広く全島に生息しています。今回調査では確認されませんでした。

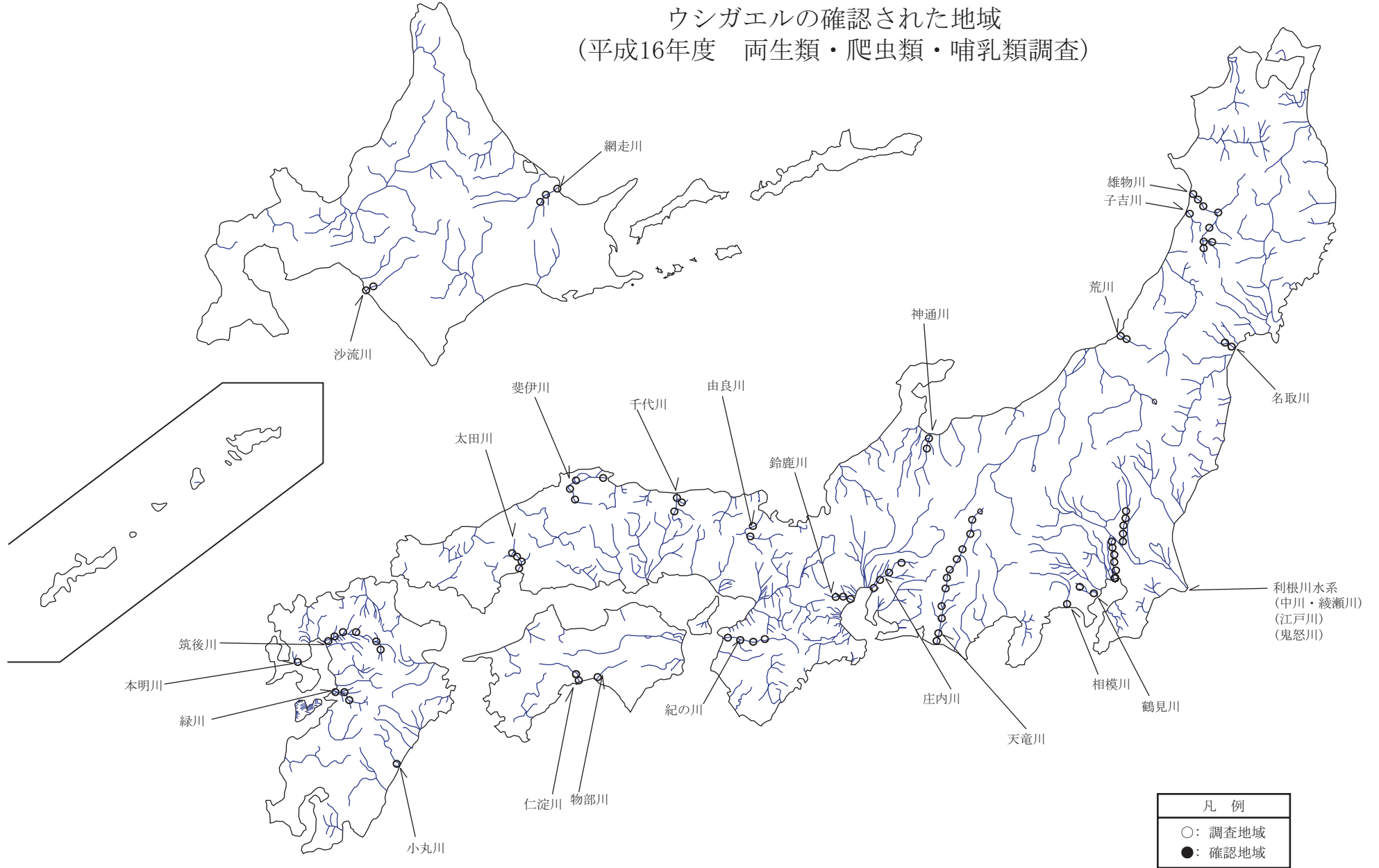
タイワンリスは台湾原産であり、戦前から各地で飼育されていたようですが正確な記録はなく、1935年に伊豆大島で飼育個体が逃げたのが最初の記録となっています。その後、観光地や都市公園に導入されました。国内では本州、九州などのいくつかの地域で定着しています。本種が杉皮の剥離などの問題を引き起こしている地域もあります。今回調査では確認されませんでした。

アライグマは、北アメリカ原産でペットとして飼われていた個体が野生化し、農業生産物への被害が報告されている種です。また、本種は雑食性であり、鳥類の卵や雛等を補食することから、在来の生態系への影響も懸念されています。日本で最初の侵入は1962年、愛知県の動物園で飼育個体の逃亡によって発生しました。続いて1979年には北海道でも飼育個体の逃亡からアライグマが定着し、その後も日本各地で侵入が確認されています。特に北海道では、農業被害が深刻化し、駆除による捕獲頭数は増加傾向にあり、生息数の増加が懸念されています。今回の調査結果をみると、アライグマは北海道地方の沙流川、関東地方の相模川、中部地方の庄内川、近畿地方の由良川及び紀の川で確認されました。そのうち3河川では、今回調査で新規に確認されました。

これらの種は、これ以上分布が広がらないように対策等が行われています。従って、今後もモニタリングを継続していく必要があると考えられます。

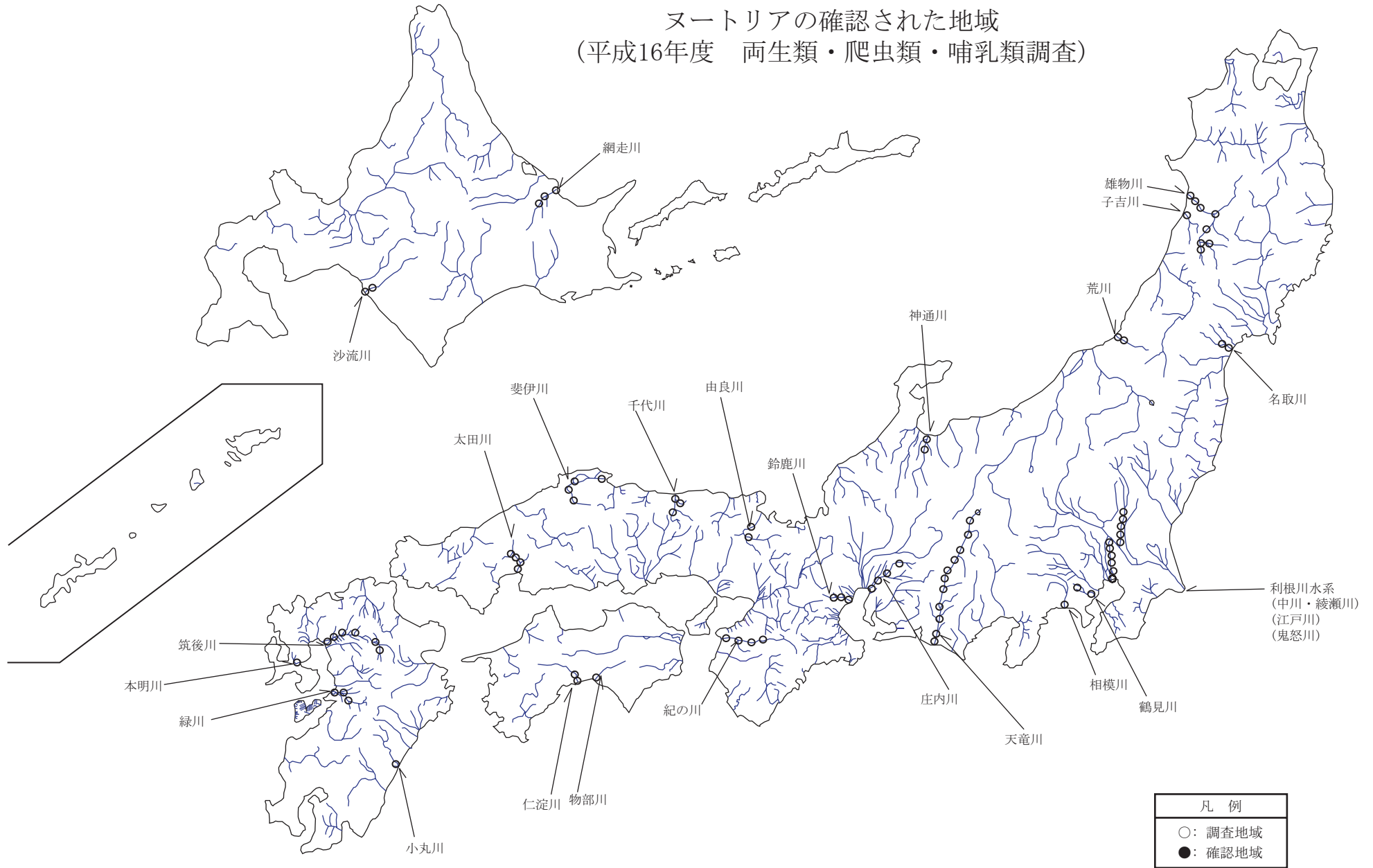
ウシガエルの確認された地域
(平成16年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)

5-27



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

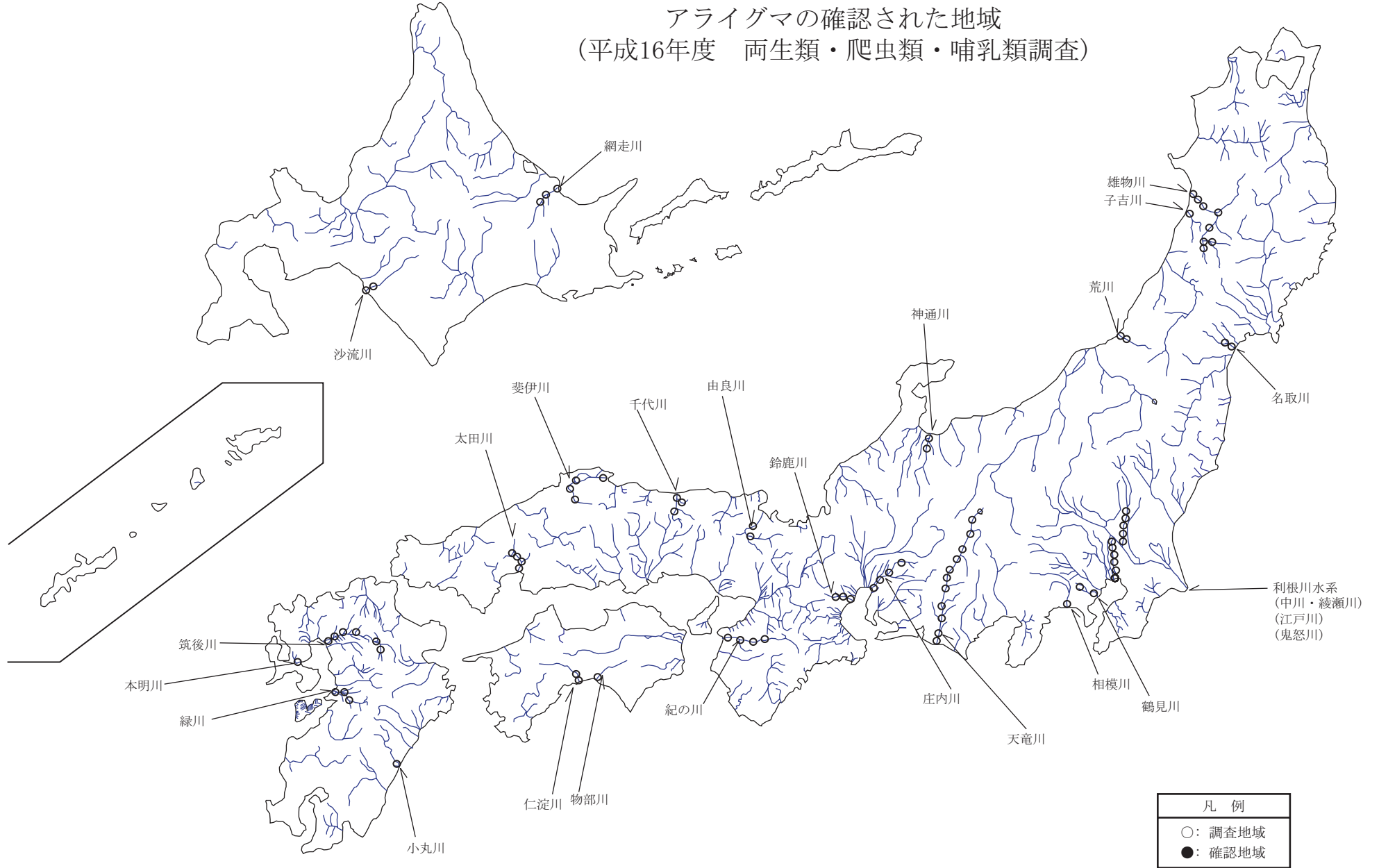
ヌートリアの確認された地域
(平成16年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

アライグマの確認された地域
(平成16年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)

5-29



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。